

京都大学	博士（文学）	氏名	Maria Carlotta Avanzi
論文題目	七世紀の日本仏教彫刻と大陸からの影響に関して		
（論文内容の要旨） 飛鳥時代後期は、国外から様々な美術様式が流入し、多種多様な様式の仏像が制作された時期である。その様相は、中国の南北朝、隋、初唐様式、および初唐期に盛行したインド的な要素を含む様式、あるいは朝鮮半島の百済・高句麗・新羅の各様式といったものが、この時期の日本の仏教彫像に同時代的に見出されるというものであった。本論文は、こうした大陸美術の影響の在り方が緊密に入り組み、多様かつ複雑な様相を示す飛鳥時代の仏教彫刻について考察したものである。 大陸との関係については、七世紀前半には朝鮮半島からの渡来人が日本の朝廷と密接な関係を築いていたことが文献から確認され、天智天皇二年（663）の白村江の戦いの前後には、百済から多くの亡命者が渡来したことが知られている。また、それより少数ながら高句麗の亡命者も日本に移住し、日本文化に大きな影響を与えた。かつての研究では、白村江の戦い以降、約30年間にわたり日本と唐の間で公式使節の派遣が中止され、当該期の日本には朝鮮半島経由で間接的に初唐の文化が流入したと想定されてきた。しかし、近年では、唐との交流が全くなかったわけではなく、貿易等の直接的な影響がありえたことが明らかにされつつある。ただ、中国や朝鮮半島からの影響関係について、個々の要素がいかなる展開を経て形成され、どのような経緯で、どの国から日本に受容されたのか、未だ定説をみるには至らず検討の余地を残している。 かかる研究状況を踏まえ、本論文は、七世紀半ばから後半頃、特に白鳳時代と称される時期の仏像を考察の対象とし、中国や朝鮮半島の遺品の様式や細部形式と比較検討を行うことで、この期に大陸美術がいかにして日本で受容され、展開したのかを解明することを目的としている。 以下、各章の概要を記す。 序章では、本論文の問題意識と目的、構成を述べる。七世紀後半の対外交渉史については、遣唐使の派遣が行われていない時期にも直接的な交渉があり得たことが明らかになりつつあり、また美術史学の分野でも蛍光X線分析調査など新たな知見が蓄積されつつある。こうした研究状況を確認したうえで論者は、白鳳時代の仏像の形式分析を積み重ねて大陸美術の要素を抽出する。そして、それらの要素が日本に伝播した時期や経緯を検討し、さらにその後の日本での展開を跡づけることを、本論文における方法論と目標として設定する。 第一章では法隆寺所蔵木造観世音菩薩立像（百済観音）を対象とし、安置場所や尊名、制作時期、様式の源流を論じる。第一節で百済観音の基本情報と先行研究を整理			

したのち、第二節で主に文献史料により知られる十七世紀以降の伝来状況を踏まえて当初の安置場所を検討した。当初の安置場所について、先行研究においては、法隆寺周辺あるいは金堂との見解もあったが、論者は当初から法隆寺内の金堂以外の堂宇に安置された可能性が高いとした。第三節は当初の尊名を検討し、水瓶を持物とする点、光背支柱基部に表された山岳から、阿弥陀如来に随時する観音菩薩であった可能性があることを論じた。ただし勢至菩薩や虚空蔵菩薩と解釈する余地も残るとして断定は留保している。第四節は本像の制作時期について考察した。近年の研究では、百済観音の臂釧・腕釧と金銅灌頂幡（法隆寺献納宝物58号）とが同時期に同一工房内で制作されたとする見解が提出されている。論者は、「戊戌年（658）」の年紀を有する根津美術館所蔵銅造光背を比較対象に加えることでこうした先行研究を補強し、百済観音の臂釧・腕釧を670年代頃の制作と想定した。さらに本節では、臂釧・腕釧に想定される制作年よりも像本体と宝冠が古い特徴を示すことを問題とした。すなわち法隆寺救世観音像・四天王像・玉虫厨子（扉絵及び金具）との比較から、百済観音の本体と宝冠について650～660年代頃の制作を想定し、臂釧・腕釧の制作との間に年代差があった可能性を指摘した。第五節では百済観音の様式的位置を検討し、止利様式の展開上に位置付け得る要素と、それ以外の要素とを分析整理した。さらに止利様式以外の要素は、初唐様式よりもむしろ北斉・隋の様式に類縁性が認められ、朝鮮半島経由で七世紀半ば頃に伝播したと結論づけた。

第二章では、兵庫県・一乗寺に伝来した銅造観音菩薩立像を考察対象とし、主に台座の細部形式に注目しながら、様式の源流と制作時期・制作地を検討した。

第一節で一乗寺像の基本情報を確認し、その源流や制作時期・地域を考える上で、子葉周辺に刻線を施した台座形式が注目されることを指摘した。第二節では、様式の類似が指摘される石川県薬師寺三尊像との比較を試み、両者が近い環境で制作されたと論じた。第三節では様式の源流に検討を加えた。一乗寺像の様式については、これまで主に新羅や隋からの影響が指摘されてきたが、論者は子葉周辺に刻線を施した台座蓮弁の形式に着目し、百済で発展した同形式の影響を想定した。第四節では、一乗寺像の制作時期と制作地域を検討した。一乗寺像の台座蓮弁にみられる文様は、七世紀半ば前頃に檜隈寺など大和の寺院の軒丸瓦に現われて、その後地方に伝播したとされている。現時点で同種の文様を持つ金銅仏が他に七体知られているが、いずれも七世紀後半に畿内で制作されたとみられる。こうした状況を踏まえ、一乗寺像も七世紀後半に畿内で制作されたと結論付けた。

第三章では、第二章で注目した台座蓮弁の細部形式に関する論を発展させ、その成立と展開の様相を跡付け、日本への伝播時期の推定を試みた。

第一節では、己亥年（639）の年紀を有する韓国益山市・弥勒寺西院石塔の舍利容器を中心に、七世紀の百済における本文様が表された作例三件を記述し、飛鳥時代に受

容された同形式との類似を再確認している。第二節では、本文様の発生と展開の状況を検討した。すなわち、中国漢代（一世紀後半）の穀物用容器に見られる翅状意匠が当該文様に類似し、この翅状文様が四世紀の高句麗古墳壁画など蕊や鉤形線を伴う蓮弁意匠に展開し、さらに同文様が百済へ伝播し発展したという形成過程を想定した。弥勒寺己亥年（639）銘舍利容器の意匠は、そのような展開のうえに百済において成立したとみられる。第三節では、本文様の日本での受容状況を検討した。早期の例は七世紀半ば前頃に檜隈寺など大和で造営された軒丸瓦に現われ、その後小金銅仏の台座、灌頂幡の順に採り入れられ、都周辺から地方へ普及したとみられる。このように、当該文様は七世紀半ば前頃に百済の事例と近い時期に現われた可能性がある。そのため第四節では、当該時期に確認される百済からの公式使節の記録に注目することで、文様の伝播経緯を推定した。この期の使節中に確認される翹岐は百済太子の息子であり、弥勒寺舍利容器を献納した皇后と密接な関係を有している。また沙宅智積大臣は仏教を支援した事績が知られる。論者はこれらの人物や随行した工人等が日本に本文様を伝えた蓋然性が高いことを指摘した。

第四章は、「山田殿像」の銘文を伴う阿弥陀三尊像の遺例として知られる東京国立博物館所蔵法隆寺献納宝物144号（阿弥陀三尊像）を対象とし、細部形式の検討から制作時期と造像の主体を推定した。

第一節で法隆寺献納宝物中の小金銅仏（四十八体仏）の概要を確認したのち、第二節で144号像の形状・品質構造等の基本情報を整理し、様式と細部形式に分析を加えた。そして、蓮華座が二重の仰蓮を伴う形式が七世紀後半期に事例が増加すること、中尊像が覆肩衣を着ける服制が天武天皇十四年（685）供養の山田寺仏頭に共通することを指摘し、144号像の制作時期を七世紀第四四半期とした。これを踏まえ、第三節では「山田殿像」という銘文を手がかりに発願者を推測し、144号の発願者の候補として蘇我倉山田石川麻呂の孫にあたる安陪皇女（後の元明天皇）を最も有力とした。また、その場合の造像契機として石川麻呂の曾孫にあたる草壁皇子が持統三年（689）に薨去したことに注目し、草壁皇子追善を目的に阿陪皇女の念持仏として制作されたとの見解を提示した。

第五章は、飛鳥時代後期に一定数の事例があるいわゆる童顔童形象について、その成立背景を検討するとともに、法隆寺金堂木造天蓋付属天人像、同六観音像、法隆寺献納宝物など法隆寺周辺の遺品を対象として編年を試みた。

第一節では、童顔童形象の特徴と成立背景を検討している。成立背景については、これまで北斉・北周・隋などに様式の源流を求める見解や、『観無量寿経』や『法華経』など経典の記述に説明を求める試みが提示されているが、いずれの見解も説得力を持つに至っていない。これに対して本章では、七世紀の東アジアにおける誕生仏の変化に注目した。すなわち、この期の誕生仏の裳は長大化する傾向があり、その背景には誕生仏と菩薩とが接近した状況が想定され、両者の混淆状況が童顔童形象成立の

一因となった可能性を提示した。第二・三節では、童顔童形像の代表的な遺品について編年を試みた。法隆寺金堂天蓋天人像はおおむね中の間付属分から西の間付属分への展開が看取され、また同寺所有のいわゆる六観音像は四グループに分類されている。本章では頭部・天衣・胸飾瓔珞の形式分類を通じて、両者を合わせた制作の前後関係（1号・3号・6号・7号→2号・観音像・伝普賢像→16号・勢至像・伝文殊像→伝日光像→伝月光像）を推定した。第三節では、法隆寺六観音および前章で論じた144号を比較基準とすることで、法隆寺献納宝物中の童顔童形の菩薩立像の編年を試みた。頭部・宝冠・髪型・胸飾瓔珞・天衣について詳細な形式分類を行い、その結果、観音像・伝普賢像と176・179号、勢至像・伝文殊像と188号、144号と174・175号、伝日光像・伝月光像と168号とにそれぞれ共通性が認められ、概ねこの制作順が想定されることを示した。

付論では、本文での分析手法を援用し、イタリア・キヨッソーネ美術館所蔵の銅造菩薩立像（Catalog No. B-1263）について制作時期の推定を試みた。同像は紙幣原版の専門家として来日したイタリア人であるエドアルド・キヨッソーネが1879年から1898年の間に収集した作品に含まれる。制作年代については、これまで新羅、奈良時代、あるいは明治時代（19世紀）という見解が提示されているが、詳細な検討は行われていなかった。こうした研究状況に対して、本章では、単髻・目・装身具・衣文などの形式比較を行い、七～八世紀の特徴を有するものの、それ以降の要素が混入することを示した。結論として、後の時代、特に訪日欧米人が美術作品を購入し始めた江戸時代末～明治時代に制作された可能性を想定し、白鳳～奈良時代の小金銅仏の様式に、中国や朝鮮半島を彷彿とさせる要素も加味して制作されたと論じている。

終章では各章で論述した問題を総括し、百済使や新羅使による百済・新羅・高句麗・中国南北朝時代の様式、遣隋使や遣唐使による隋・唐時代の様式といった多様な地域や時代の様式が、短期間に様々なルートで伝播したことを再確認した。そして、日本の工人たちは、単に伝播した大陸美術を模倣するのではなく、大陸の様式を消化して自らの感覚や趣向に基づき、新たな要素を付け加えていくことで、独自の様式を生み出したと結論付けている。

(論文審査の結果の要旨)

飛鳥時代後期は、多様な様式の仏像が制作された時期である。その多様性を生んだ主な要因は、大陸美術の影響が複雑に入り組む時代状況にあったといえよう。実際の期の日本の仏教彫像には、中国の南北朝、隋、初唐様式、および初唐期に盛行したインド的な要素を含む様式、あるいは朝鮮半島の百済・高句麗・新羅の各様式が見出されるのである。

このように多様かつ複雑な様相を示す飛鳥時代後期の仏教彫像は、日本彫刻史を代表する名品が生まれた時期としても知られる。そのため、明治時代以来の重厚な研究蓄積があるが、一方で、基準作例に恵まれないため、制作年代や造像契機について未解明の重要作例も多い。こうした状況の中、近年は、飛鳥時代後期の対外交渉史の見直しが行われ、遣唐使派遣の行われなかった七世紀後半期の約三十年間における、唐からの情報・文物の流入に関する再評価が進んでいる。また蛍光X線分析調査等の新たな分析手法によるデータも集積されつつあり、いわゆる白鳳彫刻の重要性が改めて注目を集めている。しかし、個々の作例の評価については、十分に議論が尽くされたとは言えず、中国・朝鮮半島の彫刻史研究の進展も踏まえて、再検討すべき余地を多く残している。

本論文は、このような問題意識の下、視覚的作品分析という美術史学の基本的な作業と、当時の日本を取り巻く対外交渉史の分析を通して、従来見過ごされてきた課題に果敢に考察を加えたものである。特に、複雑に諸様式が入り組んだ飛鳥時代後期の彫刻を取り上げ、その具体的な様相を解きほぐそうとする点において、極めて意欲的な研究であるといえる。

本論文は、序論に続き、計六章からなる本論及び付論、結論からなるが、本論文の検討を通して得られた主要な成果は、大きく二点に分かれる。

まず第一点は、細部形式の分類整理を主軸とする造形分析を基礎とし、対外交渉史や考古学などの隣接領域の研究とを総合させることで、従来定説をみなかった個別作例の制作年代や制作契機について、新たな見解を提示しえた点である。例えば、第一章で論じた法隆寺木造観音菩薩立像（百済観音）は、近年工芸史研究の立場からの臂釧・腕釧の分析により、およそ六七〇年代の制作を想定する意見が出されていた。それに対して論者は、臂釧・腕釧の制作年代を追認したうえで、様式分析から本体と宝冠の制作時期がこれに先行する可能性があることを指摘した。また、第二章で論じた兵庫一乗寺銅造観音立像については、蓮弁の意匠が共通する事例が七世紀後半期に集中していることから、同時期に制作されたとする見解を示している。さらに、第四章では、法隆寺献納宝物第144号を取り上げ、台座の蓮弁形式と服制の分析から七世紀第四四半期に制作されたと想定し、阿陪皇女の念持仏という従来にない新見解を提示した。作品の制作年代は、美術史研究の基礎となるものであり、その研究を一步押し進

めた点は高く評価されよう。今後も論者が同様の分析方法で研究を進展させることが期待される。

本論文のもう一つの成果は、各章での検討を通じて、飛鳥時代後期の仏像制作者や図像の成立に関わる新たな美術史上の分析視角を提示したことである。例えば、第二章で扱った兵庫一乗寺銅造観音立像については、作風の類似する石川薬師寺銅造薬師三尊像との関係から、各地を遍歴する仏工の存在を想定する先行研究に対し、ともに近畿で制作された後に各地へ移動したという見解を、蓮弁意匠の分布状況から導いている。飛鳥時代には、兄弟仏ともいうべき同一形式の作が離れて分布する事例がいくつか知られ、これらの事例を理解するうえで参照されるべき知見として注目される。また、続く第三章では、同じ兵庫一乗寺銅造観音立像に見られる意匠の生成と展開を、広く東アジアを視野に入れながら跡付けた。これにより、日本には、百済太子の息である翹岐など百済王族周辺人物の渡来に伴って伝播した可能性が示され、具体的な様式の流入経路が議論されることとなった。さらに、第五章で論じた童顔童形像については、従来經典の記述に基づいてその特殊な図像が成立したと解されることがあったものの、經典からだけでは説明できない部分も残されていた。これに対して論者は、菩薩像から影響を受けた釈迦誕生像の図像が、童顔童形像の成立を促したという興味深い論点を提示し、これまでの見方に大きな修正を迫っている。こうした見解により論者は、飛鳥時代彫刻研究の進展に必要な新たな視点を示し、今後の議論の道筋を開いたといえよう。

このように本論文は、視覚的造形分析という美術史学研究の基本的な方法論を精緻に実践し、柔軟な思考で隣接領域における研究成果などを活用しながら、数多くの新たな知見を加えている。本論文の提示した見解により、飛鳥時代後期の彫刻が、従来想定されていた以上に複雑かつ多様な様式的展開を遂げていたことが明らかとなり、そうした幾多の新知見や見解を提示した論文として高く評価される。

ただ、論者が重視した作品の造形分析や形式比較については、なお一層精度を高めて方法論を磨く必要があり、また文献史料の解釈や、他分野の研究成果の援用についても、より慎重さと厳密さが必要である。これらの問題は、関連領域研究者を含め、今後の議論を続けることで研究がより深化していくと思われる。

以上、審査したところにより、本論文は博士（文学）の学位論文として価値あるものと認められる。2024年9月5日、調査委員4名が論文内容とそれに関連した事柄について口頭試問を行った結果、合格と認めた。

なお、本論文は、京都大学学位規程第14条第2項に該当するものと判断し、公表に際しては、当分の間、当該論文の全文に代えてその内容を要約したものとすることを認める。